

世代をつなぐ秘訣

廣池千九郎エピソード 布団一つに至るまでの慈悲

廣池千九郎エピソード⑥
『品性の感化力』
モラロジー研究所
本体1,000円+税

お求めは
こちら▶から



世代間の対立は仕方ない？

「最近、息子や娘と話が合わない」「両親の考え方は古くて……」

年長の世代と若い世代の間には、意識の上で差があることが多々あります。人生の岐路である進学や就職、または結婚や子育てをめぐる、親世代と子世代の意見が対立することもよくあります。親子間では、二十年も三十年も年齢に開きがあるのですから、価値観や文化が違うことは頷けます。

しかし、そのような意識や価値観の違いがあるにもかかわらず、世代を超えて良好な人間関係を築いている場合があるのも事実です。

それでは、世代間で対立する場合と、世代を超えて良いつながりを築けている場合、両者を分けるものはいったいなんでしょうか。

今、一生懸命やっとなるんだ

良好な世代間のつながりを築けている場合に通ずるのが「信頼」です。信頼し合える関係ができれば、上の世代は安

から見れば若い世代の不十分なところが目につき、口も手も出したくなるものです。しかし、廣池が重きを置いたのは「人が育つこと」でした。多少の失敗はあっても本人に努力させ、信じて任せる。若者の伸びようとする芽を花開かせようとする、温かな心くばりがそこにはありました。

無言の慈悲

もう一つ、廣池が晩年に接した青年とのエピソードです。

昭和十二年の正月、廣池が伊豆の伊東温泉に滞在中、当時三十代の矢野造蔵氏が訪ねて来ました。廣池と一緒に風呂に入る際に、矢野氏がタオルに石鹸をつけて始めると、廣池はそれを制し、次のように言いました。「借り切ったような、こういう場合には、そう初めに洗わなくてもいい。時と場所、場合をわきまえて、風邪を引かんように早く入るほうがよい」。寒い中を来た青年の冷えた体を労わった、年長者としての深い思いやりから出た言葉だったのでしよう。

同夜、矢野氏が寝室に入ると、電気スタンドと雑誌、ちり紙が置いてあります。

心して下の世代に大切なことを任せることができ、下の世代はのびのびと自らの人生を生きたるようになります。

総合人間学モラロジーの創業者・廣池千九郎（一八六六―一九三八）の側近として奉仕した水野節子氏のエピソードです。水野氏は実家ではご飯ひとつ炊いたことがなく、台所仕事には手を出させてもらえなかったといいます。

「職員の奥さんがいらっしやうったとき、『節子さんはあんな無駄なことをしてしますけど、注意しましょうか』という声が聞こえてきました。魚を焼こうとして、早くから炭火を起こしていたので、炭火が落ちそうになっていたのです。そうしたら（廣池）博士は『黙っといてくれ。あれは今、一生懸命やっとなるんだ。この次には気をつけるから、何も言わなくてくれ』とおっしゃっていました。物が粗末になっても、人間を育てることのほうが大事だということを言われたのです。だから、本当にのびのびさせていただきました」（廣池千九郎エピソード④「まごころを引き出す」モラロジー研究所、七三頁）

若いうちは何事にも経験が浅く、親世代からなかなか認めてもらえず、親世代

そして、寢床には、「寢炉」と呼ばれる暖房器具が入れられていて、布団の隅々まで暖かい状態でした。その寢炉が十分温まるには一時間ほど要するため、それを計算して準備がなされていたのでした。行き届いた廣池の無言の心づかいに感動した矢野氏は「若い、将来どうなるかわからないような者に対しても、まったく差別なく、布団一つに至るまでお慈悲がこもっておったわけでありませう」と当時を振り返っています（同⑥『品性の感化力』、八二―八七頁）。

年長者にあつて若者にはないもの、それが「経験」です。それを、こうあらねばならないという凝り固まった常識として相手に押しつけるか、豊富な経験に基づいた分け隔てない柔軟な人間力とするかは、自分次第です。信頼でつながれたかけ橋に、人間力で安心の手すりをつける。自分の後を歩んでくる若者が、安心して人生の橋を渡るように心くばることこそ、世代を超えた良好な関係を実現する秘訣です。そうして若者に心くばることが、ひいては自分の品性、そして人間的魅力を高めることにつながるのです。（本誌）